

歴史紀行

なごや

幻の古代道路を追って

池田 誠一

—— 連載にあたって ——

これまでこの歴史紀行では名古屋のいろいろな古道を紹介してきました。平成15、16年には近世・江戸時代の古道を中心に。同じく18年には中世・鎌倉室町時代の鎌倉街道と呼ばれる道を巡りました。

しかしまだ紹介できなかった大切な道があります。それは古代・平安時代以前の道です。鎌倉街道を巡った時にかすかに垣間見た古代の道。今回は、その、幻のような古い道の道影を追って、再び名古屋の街を歩いてみたいと思います。

■【1】古代の東海道…津島から■

1 千年以上前の道

日本書紀に始まるわが国の歴史書には、道路を設置したという記録がいくつも登場します。その中で最も重要なのは「五畿七道」と「駅伝制」のことでしょうか。この新しい制度の中で、ここ尾張の国は東海道という「道」に入りました。もちろんこの「道」というのは地方を区画する名前でした。しかし「道」を通して都と各国府を結ぶ道路が整備されたため、その道路を指すようにもなったのです。このため8世紀頃には、奈良の都から伊賀・伊勢・尾張・三河の国々を通して東国へと向かう道が東海道としてこの名古屋付近を通過していました。

ではその道は具体的にどこを通過していたのでしょうか。短くとらえても1000年という長い、長い「時」を隔てた道です。これまでも多くの方がこの問題に挑戦してきました。しかしながら未だ具体的な姿は明らかになっていません。今回は、それらの先人の調査・分析を紐解き、現地を訪ねつつ、古代の道の姿を追ってみることにしたいと思います。

2 名古屋付近の古代東海道

(1) 古代道路の発掘

古代の道路に対する認識は今から40年ほど前で大きく変わりました。それまでは、古代の道路といえば、細く、曲がりくねった道が

里から里へと続いているというイメージでした。それが1970年代に始まる全国的な調査・発掘で、広く、まっすくな道が計画的に築造されていたことが分かったのです。

1988年にまとめられた「古代日本の交通路」全4巻では、歴史、地理、考古学などの学際的な調査の結果として、全国で発見された古代道路が紹介されています。(文献①)。中には航空写真の分析から、何と16⁺にわたって続く直線道路も見つかりました。その後全国で続々と発見が続き、古代の幹線道路は直線指向で、平坦な所では15⁺位の幅員(側溝の中心間で12⁺位)だったことが分かってきたのです。

東海道についてはしばらく発掘事例がありませんでしたが、平成6年、静岡県の東静岡駅の横にある「曲金北遺跡」で、幅15⁺ほど、長さ350⁺の道路跡が発掘されました(図1)。その後神奈川県の大塚でも発掘され、東海道も全国と同じような道路が整備されていたことが裏付けられたのです。



図1 東静岡駅近くで発掘された古代東海道。15メートル幅で350メートルつづいている(広報資料より)

(2)名古屋付近の古代東海道

それではこの古代東海道は、名古屋付近ではどこを通過していたのでしょうか。当時古代幹線道路には、ほぼ30里(16⁺)毎に「駅家」が

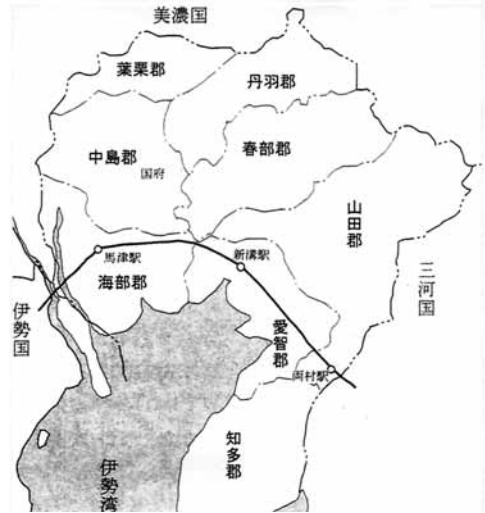


図2 尾張を通過する古代東海道想定ルートと駅家(文献②) 設けられ、通行者の便宜を図っていたとされます。

始めの頃の駅家名の資料はありませんが、10世紀の延喜式では、尾張国には、

「馬津」「新溝」「両村」

の3駅があったと記載されています。このうち馬津駅は伊勢国から木曾三川を渡った東岸になると考えられており、また両村駅は八橋に近い三河国の境、境川の手前だったというのが定説です(図2)。

問題は肝心の新溝駅です。北は①岩倉市の新溝神社付近という説から、名古屋市内の②西区浅間町付近、③中区古渡付近とする説まであります。しかし、①は北に寄り過ぎており、②は「北駅、南駅」という明治以降の地名から考えられたようです。従って、一応、③の古渡付近としておいてもよさそうです。もちろん直接の証拠になるものはありません。

もうひとつ、この古道ルートのポイントになるのが甚目寺町の「萱津」です。というのは、835年の太政官符に草津渡の渡しの船を1艘から3艘に増やすという記述があるのです(類聚三代格)。この草津は定説では萱津のこととされ、渡る川は今の庄内川・五条川と考えられています。

従って尾張の国の古代東海道ルートは、概

ね、木曾三川を渡って津島付近から東に、萱津で庄内川等を超えて東南に進み、古渡付近を通り豊明市の境川を渡って八橋に向ったと考えることができます。

(3)馬津駅



図3 松川付近の地名と微高地(畑と宅地)

さてこの歴史紀行のスタート地点は古代東海道が尾張の国に入る馬津駅です。馬津駅については木曾三川の東岸としましたが、ここにもいくつかの見解があります。しかし多くの意見は津島駅の東北、3キロほど行った愛西市町方町の「松川」ではないかとしています。その理由は、①ウマツ駅と松川の音が合うこと、②隣に東馬、西馬という地名のあること、そして③付近一帯が木曾川の流れてできた自然堤防になっていることでしょう

(図3)。

しかし松川を駅家とすると、そこから東に向う時に再び渡河が必要になります。このため川を渡った東側の津島市北町付近ではないかという説もあるのです(文献④)。

3 紀行 馬津駅

… 古い河川堤防の跡を追って …

それでは馬津駅とされる一帯を歩いてみましょう。まず有力候補地の松川から堤を歩き、津島神社に寄ってもうひとつの候補地、上街道(津島街道)の入口付近を訪ねます。

〈松川から〉

名鉄の津島駅から西北に、タクシーで千円ちょっと。町方西交差点の少し先の松川公民館で下車します。南北に走る道路は昔の佐屋川の堤防です(図4)。この堤防はお囲い堤の跡でしょうか。今でもやや高くなっているのが分かります。「松川」はここから東側、「西馬」がここから南側になります。松川といっても広く、ここを東に向かう道も堤防だった

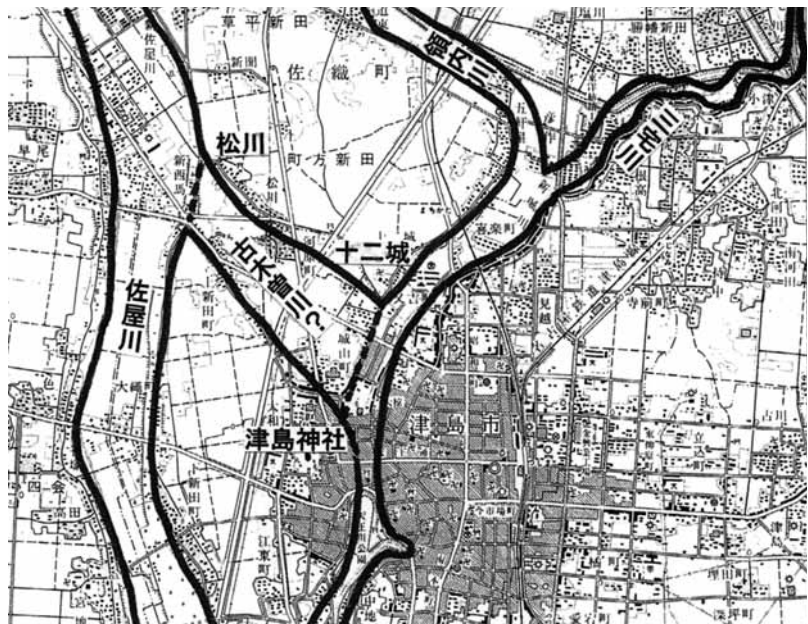


図4 中世以前の河川の流れの想定(最近の地図に文献⑤の図を組み入れた)



松川付近の河川堤防跡

ようです。見れば住居は道路の北側に集中しています。

道を東に進みます。少し行くと左に神明社があり松川集落の中心のようです。広い松川のどこに駅があったのでしょうか。道は車の行き交う道と斜めに交差し、すぐ2本目と交差しますが、その先は通れません。左側の道に迂回して進むと、少し先に姥が森神社があります。須佐之男命が来臨の時ここで老婆が神託を受けたので造られた社とされ、いわば津島神社の故地のようです。明治の初めに津島神社に移されましたが、戦後住民の手で再建されました。この付近も駅の候補地かもしれません。ここからはまた細い道を東南に進みます。



再建された姥が森神社



中世十二城址。旧堤防はここでぶつかっている

少し行くと左に唯称寺があります。この付近は十二城という中世の城館跡で、前の池は堀の跡とされ、東側には城址の石碑が立っています。

道はここで突き当たりになります。津島神社に寄るため右に曲って今度は南北の堤防跡を歩きます。この堤のほうが新しかったのでしょうか、堤らしさが残っています。南に、細い旧堤防道をしばらく辿ると右側に大きなイチヨウの木のある所に出ます。津島神社の参詣道です。

〈上街道へ〉

津島神社の立地時期は不明ですが中世、牛頭天王社として有名になり、西の祇園、東の津島と全国を二分する天王社に成長しました。楼門を入ると朱色の鮮やかな社殿が目につきます。拝殿、祭文殿、本殿を回廊でつなぐ尾張造の社殿です。古代の遺跡はないでしょうか。南に南門をくぐり、大鳥居に向かって歩くと右側に摂社の居森社があります。この居森社は540年須佐之男命が来臨し、老女が森の中に居を定めたとされるお社です。(姥が森社の方は神社内の和御魂社に移されています)



牛頭天王をまつる津島神社



天王川公園の池。昔の川はこの幅あったことになる



橋詰の三差路。右に上街道、左に下街道

す。)平安時代の神仏習合説の中で、「須佐之男命＝牛頭天王」となり、次第に牛頭天王の方が有名になったようです。

大鳥居を出て東に進むと右に池が見えます。昔は天王川が流れていましたが水量が減ったため、下流が池として残りました。江戸時代中頃までは橋が残っており、東にまっすぐ進む細い道が神社への参道です。突き当たった三差路に大きな石の道標が立っています。この角は、北に萱津に向う津島上街道、南に佐



現在の不動院。昔は広大な寺だったとされる



上街道は落ち着いたたたずまいを見せつつ、勝幡に向っている

屋路につながる下街道の起点でした。

上街道を北に進むと、古い町並みが残ります。少し行くと市神社があり、米之座という座があった地名も残ります。そこから北が北町で、付近は湊でした。この辺りが川の東岸の駅家の候補地になります。T字路を東に少し入った所の不動院は、昔は正覚院という塔頭で、本寺は甘露王寺という大きな寺だったといえます。15世紀の文書に「国中稀有の古場也」とあり、古代の駅に付随した寺院の一つだったという説もあります。街道に戻ると道は堤防の上を屈曲しながら勝幡に向っています。

4 最近の二つの発見

ここ10年くらいの間に、名古屋の古代東海道ルートに重要な二つの発見がありました。

一つは、平成10年、古代道路研究の第1人者である木下良氏が春日井シンポジウムの中で示した「地図上での古代道痕跡」の発見です。地図に載る中村区から昭和区にかけての直線道が古代道路ではないかという指摘です。

いま一つは、平成12年、名古屋市博物館学芸員の梶山勝氏が論文で示した豊明市の上高根の行者堂遺跡が「古代東海道の駅家跡」ではないかという指摘です。併せて氏は、名古屋市の平針から刈谷市の八橋付近へのルートを提案しています。

実は、私が名古屋の古代道路という難問に挑戦しようと思ったのは、この二つの新しい発見でした。従来の分析を縦軸に、この二つの指摘を横軸にすれば、何かが編み出せるのではと考えたのです。もちろん、まだ先には何も見えませんが、とにかくスタートすることにしたいと思います。

〈主な参考文献〉

- ①藤岡謙二郎『古代日本の交通路』I(1988、大明堂)
- ②古代交通研究会編『日本古代道路辞典』(2004、八木書店)
- ③『第6回春日井シンポジウム-古代を歩く・旅と道-』(1998)
- ④黒田剛司『津島歴史紀行』(1999、泰聖書店)
- ⑤横山住雄『織田信長の系譜』(1997、濃尾歴史研究所)